お試し　SAMPLE　サンプル

ＳＭ小説

美魔女狩り　TARGET No.1

銀行支店長　浅木郁子（48 歳）

お試し　SAMPLE　サンプル

お試し　SAMPLE　サンプル

あんぷらぐど著　荒縄工房・発行

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

お試し　SAMPLE　サンプル

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

不倫疑惑　5
教え込まれた体　17
お尻を愛されて　24
やって見せてよ　49
矢巾穴白黒シノブ　72
地獄のアクメ　105
お尻が大好きです　123
病室なぶり　155
悦楽調教　187
意地悪な美麗　218
部下たちの前で　253
激辛浣腸　290
特製吊り台　325

お試し　SAMPLE　サンプル

輪姦に泣く　366
尻穴女郎　404
３００叩き　433
性器破壊　447
深夜の便器修業　468
尻穴女郎の完成　482

奥付　525

お試し　SAMPLE　サンプル

　わたしの身に起きたことを、すべてお話しなさいということですので、恥を忍んで、告白させていただきます。

　４８歳のわたしが、どうしていま、こうして下着をつけることさえ許されず、２４時間、みなさまの性的な欲望や暴力的な欲望のためだけに生かされているのかを、あとから聞いた話を含めて、わかる限りお話しいたしましょう。

　わたしがこうしてお話しできる時間も、あとわかずかなのですから。

庶民的な銀行として長年親しまれている地方銀行に、大学を卒業してからすぐに就職して、行内で結婚しました。

わたしは、どういうわけか歴代の会長の信頼が厚く、この１０年は支店長となって２つの支店の建て直しに成功しました。

なにもかも、順調のようですが、子どもはいません。

結婚後、しばらく不妊治療もしたものの「もういいだろう」と夫も言うので、あきらめました。

わたしに原因があるのですが、夫はそれを責めたことはありません。

休暇には一緒に旅行へ行くのが楽しみで、２５年間、勤めの合間に２人で行った先は６０ヵ国にもなります。
彼は銀行の役員になり、仕事もプライベートも順調そのものでした。
そんなときに、事件は起きたのです。
「浅木さん。不倫していたでしょう？」
その電話は深夜、接待から帰るタクシーの中で受けたのです。
「どなたでしょう？」
聞いたことがあるような、ないような女性の声でした。
「知ってるんですよ。あなたの不倫。バラされたくなければ、いまから来て

ほしいんです」
「いまから！」
　午前０時を過ぎています。
　もっとも、わたしたち夫婦はお互いに忙しいので、理由があるときは外泊もしますし、朝方に帰宅することも珍しくありません。
　彼は役員で、わたしは支店長。お互いの仕事の状況は簡単に把握できることもあって、仕事やそこから派生するお付き合いであれば、いちいち断ることなく時間を自由に使うことができます。
「あなたは誰ですか？」
「いまから３０分以内に、いまから教

える場所に現れないようなら、明日朝、あなたの不倫証拠をあなたの支店の行員やお客様にもわかるような形で、公表したいと思っています」

　まったく心当たりがないわけではなく、どの件なのか、少し考えていました。

　相手がとても急いでいるのは、実はそれほど証拠のない証拠とも言えます。

　脅迫材料としてはきっと不確かなのです。

「そんなことをおっしゃっても、根拠でもあるんでしょうか？」

　少し強気に出てみました。

「３０分以内。あと２７分です。場所は……」
　自宅からほど近い住所です。ムリなく１０分程度で行けるでしょう。
「その前に、なにか根拠を示していただけませんか？」
「いいでしょう」
　どうするのかと思ったら、携帯の向こうで、わたしの声がしています。
「ああん、だめよ、そんな風にしては……」
「いいじゃないですか。こんなに濡れているくせに」
　その男の声。ピンときました。
　贔屓にしている美容院の美容師。藤

木祥司です。３０代半ば。独身だったはずです。

　わたしの銀行が融資をしています。やり手で、カッコよく、雑誌などでは「カリスマ」と呼ばれる美容師たちの一角に食い込んでいました。

　彼との関係は、向こうから誘ってきたもので、不倫もなにも、割り切ったセックスだったはずです。

　とはいえ、融資先のカッコいい男性と肉体関係を結んだ女支店長というのは、仕事上もあまりいいものではありません。

　きっと内外の信頼を失って、それは夫にも及ぶことでしょう。銀行という

のはそういうところです。同じような仕事をしていても、運悪く、よくない融資先に当たってトラブルに巻き込まれ、出世街道から外されていく人たちを何人も見てきました。

　能力の差はそれほど大きく出てこない職場では、上司の引きと運が出世には大きくものを言います。それは入行時に縁故や学閥などである程度の差がついていますが、入行後は、足を引っ張り合いながら、限られたポストを奪い合うのです。

　わたしも、わたしの夫も、おそらく多くの行員たちから羨望されるだけではなく、嫉妬されているはずで、少

しでも疑われるようなことがあれば、そこを利用されるでしょう。
「わかりました。いくらですか？」
「ふふふ」
　女性は落ち着いていて、低い声で笑います。
「それは、こちらに着いてからのお楽しみ」
　わたしも、いろいろな経験をしてきましたので、若い女性のような脅えや恐怖はそれほどなかったのですが、慎重に上手に立ち回らないと人生をめちゃくちゃにされかねないという意味での恐怖はありました。
　若いときなら、奪われるのは肉体で

あり心でしょう。あの頃はそれがとても大切なものに思えたものです。

　でも、いまは違います。２０年以上にわたって社会で築き上げてきたもの、わたしという人間を信頼してくれているたくさんの方々、社会的な地位、そして夫やその友人たちのことが心配になります。

　それだけ、大きな責任を負っているのです。

　負けられません。

　開き直るようですが、若い男性に誘われて、一夜を楽しく過ごす。それは、いけないことでしょうか？

　それぐらいのことで、すべてを失う

ようなことでしょうか。
「浅木さんは、年齢を感じさせませんね。いま話題の美魔女ってやつですね」
　藤木祥司は、わたしを誉めて楽しい気分にさせてくれました。
　子どもを生んでいないこともありますし、仕事やスポーツが好きなので、めいっぱい体を動かしてきたこともあって、プロポーションには自信がありました。
　年下のイケメンからそう言われて悪い気はしないものです。
　そして彼との関係は、夫婦の間でこそ、問題になる可能性はあったものの、

このような脅迫については、夫も理解があると信じています。事を荒立てることはないでしょうし、わたしの味方となって、全面的に相手と戦ってくれるでしょう。

　数名のトップクラスの弁護士の顔が浮かびます。

　やるならやろう。藤木祥司がその程度の男なら、潰してもいい。かわいそうですけど。

　それぐらいの気持ちでした。

教え込まれた体

　驚くほど、わたしの家から近い場所。
　そこが指定された家でした。
　ただ、木々が生い茂り手入れをされていない庭、古ぼけた２階建ての小さな家。誰も住んでいないのではないかと思えるのです。
　タクシーを降ります。少し迷いましたが、タクシーを待たせることはしませんでした。ここからなら、歩いて５分ほどで自宅に行けるのです。
　門は枯れた蔦がはっています。夜で、街灯しかないため、ひどく不気味に見えます。

小さな門は片側が開いたまま。

玄関へ行くと、内側からドアを開ける者がいました。

「浅木さんですね」

女性の声。

玄関の中は真っ暗で、シルエットしか見えませんが、その香水は若い女性が好きなタイプで、この家には似合わない華やかさがあります。

これは、交渉しだいではないか、という感触を持ちました。

外見を飾る人は、体面を重んじる人が多く、恥をかかされたりして怒っていることが多いのです。金銭で簡単にすませることはできませんが、ある意

味でピュアですから、きちんと話し合えばわかっていただけることが多いのです。
　金銭の要求はそれほど重要なことではない場合が多いと思います。
　説得には自信があります。
「申し訳ないけど、そこにあるアイマスクをしてくれません？」
「え？」
　シルエットの女が細いビームの懐中電灯をつけ、玄関の入ったところに落ちているアイマスクを浮かび上がらせました。
　とても抵抗があります。
　それを取る動作だけでも、相手にス

キを見せることになりはしないか。
　なにかの罠だとしても、ひじょうにマズイことになるのではないか。
　そしてアイマスクをつけてしまったら、とんでもなくマズイことになるのではないか。
「５つ、数えます。それまでにアイマスクをつけないなら、この話は終わりです。５、４、３」
　選択の余地がないのです。
　わたしはできるだけすばやく、かがんで、アイマスクをとり、それを目の上にかけました。
「じゃあ、前に進んでください。手をこちらに」

言われるままに手を前に出すと、温かな女性の手を感じます。

それに引かれて靴を脱ぎ、廊下にあがりました。

「こっちよ」

わたしは指先まで汗をかいていましたが、相手はサラサラです。

修正しなければなりません。相手はやけに落ち着いています。よく練られた計画なのではないか。相手は彼女だけではなく、数人いるのではないか。だとすれば、交渉は難航するかもしれません。

２歩、３歩。

背後に人の気配があります。

玄関の外に１人、待ち構えていたのです。
その人物が玄関のドアを閉じながら素早くわたしの背後に立ちました。
男だ。
あっと思ったとき、女性がわたしの両手首を強くつかんでいました。
同時に、カチャッと金属音がし、手錠をかけられていました。
「なにするの！」
さらに修正。相手は暴力的かもしれません。マズイです。説得はできそうにありません。
「大声は出さないでください。脅えているのはこちらなんですから」

　聞いたことのない、柔らかな男の声。背中に感じる男の胸板は分厚く、日頃からトレーニングをしているようです。

　その若い男ならではの臭いに、脅えます。

　困った事態だということ。それだけではありません。

　こんな状態なのに、若い男の存在が、わたしの体の奥にじわっと熱いものを感じさせるのです。

　藤木に教えこまれたものが反応してしまう……。

お尻を愛されて

　手錠を男がつかみ、引っ張ります。女が後ろにまわり、背中を押します。廊下をまっすぐ。そして、広い部屋に入ったことがわかります。

「座るのよ」

　イスがあるのかと思い、手を取られたまま、腰をおろしますが、どこまでしゃがんでもイスはなく、床に直に座らされるのでした。

　手錠になにかをしているようです。

「これで逃げられないわね」

　手を引こうとしても伸びたままです。手錠にロープのようなものをつけ

たのでしょうか。それが天井から下がっているらしく、手を上に上げたままのかっこうです。

　すぐ近くに男の足があります。

　立ち上がればいいのでしょうが、男の足がわたしの足首の上にのっかります。人には靴を脱がせたのに、男は靴のままです。

　それが、とてもショックでした。

　ざらざらした靴底がくるぶしを踏みつけているので、すっと立つことができません。ロープを伝えば立てると思いますけども。

「暑いですか？」

「いえ」

「汗をかいてらっしゃる」
「暑くはありません」
　というか、そんな感覚はないのです。
「服が窮屈そうだわ」
　女がわたしの服に手をかけます。
「やめてください」
「だめよ」
　逃げようと体をねじっても、女は上着をはだけさせ、スカートをはずしてしまいました。
「まあ、高級そうな下着だわ」
　女の手がブラをいじります。
「スリムだけど、それなりにオッパイは大きいんじゃない？」
「まあ、年齢が年齢だからさ」

「そんなことないわよ」
　女がブラを外します。フロントホックなので、左右にわかれて、乳房がこぼれ落ちます。
「ほーら、どうよ」
　女が下から果物かなにかのように持ち上げます。
「なるほどな。熟女好きにはたまらないんだろうけど、オレはそんな趣味、ないぜ」
「あいつはあったわけよ」
「あいつは変態なんだ」
「彼のことを悪く言わないで。とにかく、美魔女とか言っちゃって、お金かけてキレイにして、若い男をつまみ食

いするような女だから……」
「わたしはそんなんじゃありません！」
　ケラケラと女が笑います。
「写真を撮ってあげるわ」
　パシッ、パシッと本格的なストロボの音がします。宣伝の撮影に立ち会ったこともあるので、傘を使った照明が立ちならぶスタジオを連想します。
　まさか。
　目隠しをされているので、そこがどういう部屋かわかりません。もしかすると、真昼のように明るいのではないでしょうか。
　急激に恥ずかしさがこみあげてき

ます。
「お願い。許して。話し合いをしましょう。それでいいんでしょう？　気がすむように……」
　男が足に体重をかけてきました。
「気がすむようにね。もちろんだよ。あんたがしたことはどういうことかわかってるのか？」
「なにも悪いことはしていないわ」
「しているさ。夫がある身で、若い男とセックス三昧。その若い男には傷つきやすい彼女がいたんだよ。同じ女として、どう思うんだよ」
　わたしが返事をしないと、すぐ近くに女のにおいを感じました。

「傷ついたわ。彼が浮気をしていたなんて。おまけに５０近いババアとなんて……。わかる？　彼がモテることは知っていたけど、あなたみたいな女と関係するなんて信じられないわ。なに、お金でも使ったの？　枕営業ってやつ？　それとも不正融資？　審査を甘くしてやったの？」
「そんなことできるわけないじゃないですか」
　いまさらながら、彼らがわたしについて熟知していることが恐ろしくなってきました。銀行の支店長を拉致する……。
　狙いはお金でしょうか。それもかな

りまとまった額かもしれません。
「まさか、あんた、本気じゃないわよね？　藤木を好きだったの？」
「本気のはずないでしょ」
　バシンと女がわたしの頬を叩いた。本気だと言っても、遊びだと言っても、彼女は暴力をふるったでしょう。
「じゃあ、こういうこと？　あなたはわたしの彼をもてあそんだ。快楽の道具にしたと？」
「彼が誘ったのよ」
　バシン。
　さらに強いビンタです。
　人に叩かれた経験がないので、これほどショックだとは思いませんでし

た。頭が、ぼんやりとしています。
「なんでも、立派な銀行の支店長さんらしいわね。旦那さんは銀行の役員ですって？　きっとお知り合いも多いんでしょうね」
「そうよ。知事、市長、警察署長、議員、弁護士、たくさん知り合いがいるの。これ以上、わたしを怒らせたら、あなたたち、大変なことになるわよ。すぐにわたしを帰して。明日、ちゃんと話し合いましょう」
　男が笑う。
「おまえの指定した場所にのこのこ顔を出したら、その場で逮捕か？　容疑はなんだ。脅迫。監禁。いや、もっ

と罪の重い誘拐を持ち出すかもしれないね」
「そんなことはしない。誠実に話し合うわ」
「バカな」
　男はわたしの足首が折れてもいいと思っているのか、思い切り体重をのせてきました。
　わたしの手を吊している縄を持ってバランスを取っているようです。
「痛いわ。その足をどけなさい。わたしの体に痕跡が残るようなことをしたら、ますます、あなたたちの立場は悪くなるのよ」
　でも、男はやめないのです。

「ぎぃぃ、いったぁいぃぃぃ」
　左の足首をくじいたようです。骨が折れているかもしれません。
「どうです。気分は？」
「あなたたち、考えなさいよ。自分がなにをやっているのか。こんなことをしたらどうなると思うの」
　涙がにじみます。
「さあ、どうなりますか」
　男はまだ無傷の右足首に乗りました。
「やめて！　お願いだから」
　わたしは泣いていたと思います。痛みと屈辱に、どう反応していいのかわからないのです。

　そして、この連中は、わたしと話し合うつもりなんてまったくないのです。
「ぎゃー」
　男は勢いをつけて、右足首を踏みつけました。そしてダンスでも踊るように、踏みにじるのです。
　両足とも……。
　恐ろしい連中なのです。１人でこんなところへ来るべきではありませんでした。
「わたしが、行方不明になったら、大勢の人たちが探すのよ。ここはタクシーで来たから、すぐバレるわよ」
「そうですか。みなさんが来るまで、

何分あると思いますか？」
　帰宅が遅いことに夫が気づくのはいつだろう。お互いに仕事の付き合いで遅い場合は、それほど心配しなくなっていた。
　朝まで気づかないかもしれない。
「すぐよ。わたしが帰らなかったら、夫は携帯に電話するわ。そして携帯で返事がなければ、場所を特定しようとするでしょう。３０分もあれば……。うぎぃぃぃ、やめて、やめて、それ以上は……」
　気が遠くなります。
　くじいたぐらいではすまないでしょう。痛めた両足首を、男はなおも踏

みつけ、つま先で蹴り上げるのです。
　わたしは床の上で足を逃がそうともだえますが、たいして動けないのです。
　逃げようと動いたところに待ち伏せされて、自分から足を打ち付けてしまいます。
　しばらく、わたしは悲鳴を上げながら、半狂乱になっていました。これだけ騒げば、この近所は閑静な住宅地なので、誰かが気づくかもしれません。
「うるさいババアだね」
　女が叫びます。
「３０分か。もしそうなったら、面倒だから、その前にやってもらうことが

ある。目隠しを取る」
　苦痛の中でのたうちながら、男の声を聞いていて、それはマズイと感じました。
「ダメ。目隠しは取らないで。あなたたちをまだ見ていないから。いま逃がしてくれれば、わたしはあなたたちのことを探そうとしても、探せないのよ。お願い、このまま逃がして」
「ふん」
　女が鼻で笑い、目隠しを取ってしまいました。
　思った以上に明るい部屋なのです。まぶたを閉じていても、まぶしいほどの光であふれています。

「見るんだ」
「いやです」
「目を開けろ」
「いや」
「開けないなら……」
　男がわたしの乳房を鷲掴みにしました。
「ぎぃぃぃ」
　愛撫ではないのです。引きちぎろうとでもするかのように、ツメを立てています。
「年齢のわりには、たしかに手入れもいいし、きれいなものだ。子どもがいないからか？」
　もてあそぶのです。

「目を開けろ」
「開けますから……」
　暴力の限界を知らない連中かもしれません。
　愛撫し、犯されるぐらいなら、わたしもこの年齢ですから、心に深い傷を負うとしてもまだ耐えられるでしょう。
　でも、暴力で、両足首を完全に破壊されたように、乳房になにかをされたらと思うと、恐怖が大きすぎて、正常な判断はできなくなります。
　目を開けました。
　まぶしいです。
　真っ白に輝く部屋。毛穴まではっき

り見えるほど。これほど明るいところにいたとは。

　スタジオに似ています。思ったよりも狭いのです。見回すと、傘のついたストロボが２基あります。三脚にカメラがのっています。

　本格的な撮影ができます。

　そしてわたしの変わり果てた足。赤黒く腫れ上がり、皮膚が裂け、少し出血しています。

　病院に行かなければ、このまま元には戻らないかもしれません。

　歯がガクガクと鳴ってしまいます。

　わたしを襲った男はまぶしいライトの影にいます。大きな影です。あの

体重で思い切り踏みつけられて、ひとたまりもなかったのです。
　女の足もぼんやりしています。
　カメラの三脚の横には、イスに縛り付けられた藤木祥司がいます。口のまわりには血がついていて、二枚目なのに、台無しです。
　死んでいる？
「藤木さん！」
　わたしが声をかけても返事はありません。
「ゆうたん、なにがしたいの？」
　部屋にわたしの声が響きます。ああ、それは情事のときのわたし。録音されていたのです。

「うん？　郁子のすべてが知りたいんだよ。ここをいたずらしてもいいかな？」
「ああん、ゆうたん、悪い子ねえ」
　彼がわたしにアナルセックスを迫って来たときですから、忘れるはずもありません。
「郁子のお尻、すげえ、カッコいいよ。犯したいんだよ」
　彼の声がして……。
「やめて！」
　わたしは叫びます。
　正直に言います。1度だけの火遊びではありませんでした。ほぼ毎週。どこかで会ってはセックスをしていた

のです。
　若い藤木を喜ばせるためなら、わたしはなんでもしてあげました。
　アナルセックスも、この年ではじめての経験でしたが、藤木に徹底的に仕込まれました。
「郁子はケツ穴が最高だよ。知らなかったなんて、もったいないね」
　藤木は無邪気に喜んでいました。
　アブノーマルだとまでは思いませんでした。心理的な抵抗はありましたが、若い藤木たちの世代では普通の行為なのかもしれないと、理解してあげようとしました。
　それに、彼をつなぎとめるために、

それなりに必死だったのです。それほど彼はかっこよく、魅力的でした。
「変態だったのね、支店長さんは」
　女が１歩、前に出ます。顔を見てしまいました。
　藤木の美容院にいる女性のスタイリスト。名前までは覚えていません。モデルのようにきれいな子です。
「覚えてます？　松葉かおるです」
　そしてぐったりしている藤木の髪をつかんで、顔を上に向けます。その顔にツバをはきかけます。
「ババアのケツ穴を犯して喜ぶなんて、サイテーの男だったわ」
「殺したの？　まさか、死んではいな

いでしょう？」
「確かめてみればいいさ」
　男も姿を現しました。見たことがありません。長身でがっちりした体つき。３０歳は超えているでしょうか。きつい目をしたイケメンです。
「あ、オレは、探偵をやっている阿久と言います。松葉さんに頼まれて、浮気調査をいたしましてね」
「盗聴したの？」
　阿久とかおるは、イスをすべらせて、藤木をわたしの前まで進めてきます。
　かおるは藤木のズボンを脱がせ、トランクスも脱がせて、下半身を剥き出しにします。

「ほら、あんたが大好きなチンポよ。やさしくしゃぶってあげたら、目をさますかもよ」
　生きているのでしょうか。
　それを確かめたくて、恥らいもなく、彼ににじり寄ります。足の痛みも忘れて、近づきます。
「おっと、口で、チンポだけに触れるんだ。ほかは触れるな」
　手は吊り上げられ、足は痛くて力が入りません。この状態でなにができるというのでしょう。
　こいつらにあらがっても無駄です。生きているのかどうか。それを知りたいので、言われるままに藤木の股間に

口をあてました。

　あたたかい。生きている。反応もしています。おしっこの臭いがします。漏らしたのでしょうか。すえたような、若い男性のニオイです。藤木の好きなオーデコロンの残り香。

　でも、こんな状況にしては、あまりにもまともです。彼は生きているのでホッとしつつ、だとすれば彼らはなにが狙いなのでしょう。底知れないものを感じます。なにかがおかしいのです。

やって見せてよ

「気がすんだでしょ」
　彼女がわめき、髪の毛を引っ張られ、離されます。
「さっき、時間がないと言ったね。もし、ここに警察とか、あんたの旦那がなだれ込んできたら、あんたはどう説明する？」
　わたしはごくりとツバを飲み込みました。彼らがなにを求めているにしても、理不尽な要求です。彼らは犯罪者です。わたしは被害者です。
　でも……。
　探偵だという阿久という男は、音声

お試し　SAMPLE　サンプル

お読みいただき

ありがとうございました。

2012 年 10 月刊行

著作権　2012 年　あんぷらぐど

荒縄工房の情報は下記サイトへ

ブログ「荒縄工房」

ホームページ

ＳＭ研究室

荒縄　淫美

刊行作品情報はお好みのストアで。

DLSite（同人 DL で最大規模）

DMM.R18（二次元から動画まで）